

財団法人東方研究会／東方学院

東方だより

第十三号

役員ご挨拶

理事長・東方学院院长

前田 専學



二〇〇八年は四名もの日本人科学者がノーベル賞に輝き、日本中が喜びに湧きました。ノーベル賞に値するような革新的な研究は、多くの場合、研究者が三代に切つ掛けを掴み、やがて四十代に完成するという傾向が強いと言われていいます。このことは二十代後半から四十代までの充実した研究生活がいかに研究者にとつて重要であるかを端的に物語っています。

通常、人文系研究者の場合、二十四、五歳で修士となります。しかし二十七、八歳で博士となることは容易ではありません。研究の傍ら、アルバイトよくて大学などの非常勤講師の職を幾つも掛け持ちして、生活の資を得る必要があります。結婚すればますます研究の時間が制約されます。他方、研究に専念して研究論文を発表し、実績を積み重ねれば、研究職や教授職につくことは不可能なもので、若手研究者には先の見えない焦燥感と絶望感に苛まされる長い苦悩の日々が続きます。運良く博士号を得ても、四十歳前に専任のポストを得ることはまず不可能であり、五十歳になっても、専任のポストが得られる保障は何処にもないのが現状です。

自然科学の場合は、おそらく人文科学の場合よりも条件はよいと思われませんが、それでもポストク(博士研究員)の問題は深刻です。とくに女性ポストクの場合にはさらに切実です。しかも人文科学の場合、科学技術偏重の煽りを受けて、年々ポストクの数が減る傾向にあるのです。わが国の八十万人の研究者の代表機関である日本学術会議でも、マスコミでも、その重要な課題の一つとして若手研究者の育成を取り上げることもありませんが、解決の道は依然見いだされないうままです。世界がかつてないほど学術的に急速に進歩し、競争の熾烈な時代に、若手研究者の柔軟な頭脳が悲惨な状態におかれていた日本の将来は危ういと言わざるを得ません。

〒101-0021 東京都千代田区外神田2-17-2 延寿お茶の水ビル 4階 TEL 03-3251-4081 FAX 03-3251-4082 URL http://www.toho.or.jp

第十三号 目次
役員ご挨拶 2頁
第十八回中村元東方学術賞授賞式 3頁
平成二十年下半期行事報告／「閑話本題」 4頁
東方学院講師紹介 5頁
研究会員の声 6頁
研究員紹介 7頁
東方学院のご案内／「脚下照顧」 8頁
財団法人東方研究会からのお知らせ

元先生の学生の頃からすでに重大な問題であったのです。中村先生が財団法人東方研究会を設立されたのはこのためでもありました。今から、約四十年前も前の事であり、先生の先見の明に驚かされます。

当財団は、今までにすでに八十名ほどの斯学の若手研究者を育成し、学界に送った実績をもっております。現在も、色々な(中には外国の)大学出身の三十六名の優秀な研究員(修士二十二名、博士十四名)を擁しております。当財団法人東方研究会は、皆様方の温かい経済的・精神的なご支援によって、これらの金の卵を育成すると同時に、付置の東方学院や機関誌『東方』などを通じて、かれらの研究成果を社会に還元するなどして、最大限公益に資するように努力しております。

その真摯な努力が認められたのでしよう、昨年の十月、当財団は、厳しく長い審査の末、税制の優遇措置が受けられる特定公益増進法人として、文科省から再度認可されました。これを足がかりに、私も、中村先生の高邁な理想を継承するため、新制度の公益財団法人となるべく最大の努力を致す所存でございますので、本年も引き続き皆様方のご協力とご支援をお願いいたします。

当財団「特定公益増進法人」認定へ

主事 堀内伸二

理事長の巻頭挨拶にございます通り、東方研究会は、昨年十月二十三日、特定公益増進法人(略称「特増」)に「再び」認定されました。このことは、ご寄付頂いた方には寄附に対する免税が認められるなど、税制面における優遇措置が受けられるという実益のみならず、創立者中村元先生が掲げられた、「東洋思想の研究とその普及」という理念を、堅実に具現化してきた当法人の実績が公に認められたという点で、たいへん意義深いものにございます。これらひとえに、前田理事長の誠実な指揮の下、陰に陽にご協力いただいた皆様、また所轄省庁担当官のご指導の賜と篤くお礼申し上げます。有り難うございました。
顧みますと、この度の認定を得るための準備を開始したのは、平成十七年七月に遡りますから認定まで実に三年三ヶ月を

要したことになります。

そもそも中村先生が設立された当法人が、文部大臣によって最初に特増認定を受けたのは、平成十二年一月十四日のことです。以来、基本的には、最初と同じ認定基準にしたがって、二年ごとに関係書類を整え継続申請を行いさえすれば、認定は受けられてきました。ところが、特増認定の法的根拠となっていた育英会法が、平成十五年に廃止されたことに伴い、新たに財務省が認可に関わることになり、人文科学研究に対して「研究事業費が総事業費の七割を超えること」という財務省基準が出されました。冒頭に記しました通り、中村先生は、研究の大切さは言うまでもなく、しかし、それにも増し、その研究成果・東洋思想の持つ叡智を広く人々に普及し、人々の糧とすることを非常に大切にされていきました。当財団の定款たる「寄附行為」の目的に、「研究」と共に「普及」が並記されているのであります。

認定まで長い道のりを要した大きな理由の一つは、研究員の常勤性をめぐる問題と共に、この「普及」に関わる事業の扱いをめぐっての問題であったか、と思考する次第です。ただこの点は、昨年十二月一日に、関連三法が施行されいよいよスタートした(法的には、現在、当法人は「特例民法法人」となっています)法人制度改革においては、「公益法人」の満たすべき必須条件として、研究成果の「アウトプット」が強く謳われていることを思うとき、中村先生の理念が財団のあるべき姿を的確に見通されたものであったこと、それを文字通り継承し公益に資するべく事業を展開してこられた現理事長の着実なる運営の正しかったことを再認識する次第です。

ともあれ、今回、財務省の厳しい眼からしても、特増に値するという認定が得られたことは、法人制度改革において公益認定法人に認定された場合、自動的に特増の恩典が得られるということも鑑みると、今後の財団法人にとって重要な意義を有するものであると同時に、改めて特増に認定された財団としての社会的責務を痛感する次第です。

第十八回中村元東方学術賞授賞式

当財団の創立者である中村元博士が顕著な功績のある研究者を顕彰することを目的として設立した中村元東方学術賞の第十八回（平成二十年度）の受賞者が、選考委員会による選考の結果、津田眞一博士（国際仏教学大学院大学教授）に決定し、その授賞式が中村元博士の命日である十月十日（金）東京都千代田区のインド大使館において行われました。

授賞式には、駐日インド大使 H・K・シン閣下にご臨席頂いたほか、多くの関係各位にご参列頂きました。式では前田専學選考委員会委員長からの審査報告に続いて、当財団及び駐日インド大使館より、それぞれ賞状と記念品とが津田博士に授与されました。また、大使閣下と川崎信定博士よりお祝いのお言葉を、津田博士からは謝辞を頂戴いたしました。

式の終了後、大使館近くの弘済会館内に会場を移して、引き続き多くの来賓を迎え、津田博士を囲んで盛大な祝賀会が催されました。



上：祝賀会での津田眞一博士とご令室
下：前田専學選考委員長による審査結果報告

駐日インド大使 H・K・シン閣下のお言葉



駐日インド大使 H.K.シン閣下

前田東方研究会理事長、奈良東方研究会常務理事、津田眞一国際仏教学大学院大学教授、そしてご来賓の皆様、こんばんわ。第十八回中村元東方学術賞授賞式によるご集まりくださいました。

いつもどおり過去数年間にわたり、毎年恒例のこの式典を当インド大使館で開催させて頂くことが出来、光栄に思っております。日印の人々、文化、国々の相互理解のための中村元博士の多大な貢献を深く尊敬しております。

今年度の受賞者であらせられる、国際仏教学大学院大学教授津田眞一教授に、心より温かいお祝いを申し上げます。津田博士の創造性と学術的貢献は、中村元博士自身が評価され、先生の仏教研究に対する、一九六〇年代から続く卓越した貢献が受賞の理由となりました。

ご来賓の皆様、長期に渡ります日本とインドの文化的友好関係のはじまりは、およそ六世紀にまでさかのぼります。そして、一四〇〇年の長い年月を経てまいりました。慈悲と智慧という釈尊のメッセージは私たち両国に伝わるものです。歴史を通して培ってきた貴重な交流は、二つの文明を豊にしてくれました。

私たちが共有する精神的遺産を基盤として、この友好関係をさらに強いものに築きあげていけるようにと願っております。日印両国の人間は、寛容、調和、慈悲といった価値観を共有していることをご理解頂けると思います。こうした要素は世界平和を進展させるため、異文化間の調和を育み、世界の人びとに兄弟愛の精神を育てるために、日印が共同していく基本となります。

長期に渡る、前田理事長、そして東方研究会の人々の日印関係の強化に対する大変な貢献に対して、感謝申し上げます。今後の事業の継続と発展を祈念申し上げます。来年この会が催される時には、大使館の新しい文化会館が完成していると思っております。そこで、大きく開催出来ることを期待しております。

最後に改めて津田眞一博士に本年度の受賞をお祝い申し上げます。皆様、ご出席有難うございました。

津田博士の謝辞

謝辞に立った津田眞一博士は、自身の学問的軌跡を様々なエピソードを交えて振り返り、中村元博士ら恩師から受けた影響などについて述べられました。また、中村博士が設立した東方学院で三十年以上講師を務めてきた経験に触れ、「東方学院で勉強させていただくことは最高の幸せ。今では大勢の方が来てくださり、皆さん非常に教養が高く頭が良い。中村先生は、ここでは師弟関係ではなく師友関係だと言われたが、私は師弟関係だと思っています」と述べつつ、榮譽ある賞を受けた喜びと感謝を表明されました。

【略歴】昭和十三年生まれ。東京大学文学部印度哲学梵文学科卒業。東京大学大学院人文科学研究所印度哲学専門課程博士課程進学後、オーストラリア国立大学に留学。文学博士（東京大学）。東方研究会研究員、ロンドン大学客員教授を経て現職。真言宗豊山派真福寺住職。東方学院では「解釈学的仏教学」（木曜・十五時〜十七時・東京本校）を現在開講中。

【専門分野】密教・密教思想史

【著書】『反密教学』（リプロボート・一九八六年／改訂新版・春秋社・二〇〇八年）、『空海』（中央公論社・一九九三年）、『金剛頂経』（東京美術・一九九五年）、『アーラヤ的世界とその神—仏教思想像の転回』（大蔵出版・一九九八年）等がある。



壇上で受賞の喜びを語る津田博士

行事報告

平成二十年下半期(七月〜十二月)

第十八回鎌倉夏期宗教講座

八月二十四日(日)、第十八回となる鎌倉夏期宗教講座が鶴岡八幡宮のご協力により鶴岡八幡宮直会殿にて開講されました。この夏期宗教講座は、昭和六十三年に開講して以来、毎年欠かさず続けられてきました。今年度は「いま、『いのち』を考へる」を総合テーマとして開催されました。当日は多数の受講者にお越し頂く中、初めに前田専學東方学院院长、奈良康明常務理事より挨拶が行われました。続いて、京都大学名誉教授・秩父神宮宮司である藺田稔先生による「神道における『いのち』のシンボリズム」、東京大学教授である下田正弘先生による「涅槃について―仏教における『いのち』―と題するご講演が行われました。講演の後には両講師と前田東方学院院长、奈良常務理事を囲んでの質疑応答の時間が設けられ、参加者との間に活発な議論が交わされました。

第九回酬佛恩講合同講演会

十一月二十八日(土)午後、奈良市西ノ京の法相宗大本山薬師寺において、同寺のご後援の下、東方学院と酬佛恩講共催で第九回目となる合同講演会を開催いたしました。講演会は前田学院長の挨拶に始まり、チベットへの留学経験を踏まえた、目片祥子氏(東方研究会アジア諸国派遣留学生・大谷大学大学院)による「十一〜十三世紀のチベット仏教史―サキャ派を中心として」と題する講演と、四天王寺大学教授である西岡祖秀先生による「チイク・ナット・ハン師の社会参加仏教」と題するご講演とが行われ、最後は薬師寺の松久保秀胤長老より閉会の辞を賜り閉会いたしました。



西岡先生のご講演の様子

ナマステ・インディア二〇〇八

九月二十七日(土)二十八日(日)、東京の代々木公園内で開催された「第十六回 ナマステ・インディア二〇〇八」(URL: <http://www.indofestival.com>)にブースを出しました。このイベントは「日印交流年」における中心的行事の一つであり、インドと関係のある多数の方々が参加しています。当財団のブースでは学院講師の的場裕子先生(ヴィナー奏者)のプロデュースのもとムリダングム体験教室と共に東方学院およびホームページ等に関する各種印刷物の配布を中心とする広報活動を行いました。両日、多数ご来場頂き有難うございました。



上: 会場でムリダングムの個人指導



下: 会場での当財団ブース

せんせい

佐藤宏宗(研究員)



一九九九年から二〇〇二年の三年間、プーナ大学大学院サンスクリット語高等研究所所長、N. Jha教授の指導のもとでインド哲学を学んだ日々、それは私の掛け替えのない宝物である。

時は一九九七年の二月半ば、公私共に様々な出来事があり心身ともに疲れ切った私は、すべてを捨てて日本を離れた。何も持たずにたった一人で、インドへ出ていっていき、プーナの街に辿り着いたのは真夜中のことである。そんな私をJha先生は暖かく迎えて下さり、"Sato, I remember you."と微笑みながら仰った。

実は、その数年前にJha先生が客員教授として来日しておられた時に、私はそれまで手掛けてきた文献解説で分からない箇所を先生にしたことがある。それも同じ質問を一日に三度したたのである。しかし、Jha先生は嫌な顔を一つもなされることなく、そのお答えは二度とも同じものであった。

たった一度しか会ったことのない私のことを覚えて下さり、何もかもに疲れ切った私に、何も言わずに微笑んで下さったことには、そっとさし出して下さった温かいチャイ、あの時間を今も忘れることはない。その時、私は思った、"Jha先生のサンスクリット語を身に付けるまでこの地を離れることはないだろうと。"

突然訪れた私を同機関サンスクリット語学科博士課程への正式留学生として受け入れる準備をJha先生自らお手伝い頂き、その後一時帰国した私が日本でインド政府認可のリサーチヴィザ取得のために一年半以上の時間を費やしていった間も、あの荒涼としたインドの大地で私を待っていて下さったJha先生に心からの尊敬と感謝の念を抱いている。できの悪い弟子の私であるにもかかわらず、早朝から献身的に指導して下さいましたJha先生の姿はまさに「師としての Svadharna の遂行」そのものであり、古来不変に受け継がれてきた口伝そのものである。Jha先生との個人レッスンは身体が震えるほど魅力的で夢のような時間である。

第3回

研究員のコラム

閑話 本題

"Sato,
sarvam anityam.
Everything is of momentariness.
Do not hurry.
You learn everything slowly, slowly.
If you do so, you can do everything."
"There are many objections to every theory.
But it is the difference of expression."
Sato,
The most important thing is not to reject other's
theory but to know tathva(truth)."

目を閉じると今も聞えてくる、優しく微笑まれるJha先生の透き通るような声にのっけはなたれる言葉、その一つ一つがインドそのもののように居てならない。大きなインドの大地は、決して人間が作り出した無味乾燥とした遺物を残しはしないが、しかし、時間を越えて深く計り知れない知的遺産を現在に至ってもまだなお継承していることを、絶えず私に語りかけてくれるかのようだ。Jha先生は今も変わることなく、インドの大地に、そして私の中にいて下さるのである。

東方学院 講師紹介

川崎 信定

(筑波大学名誉教授)



今から五十八年前の昭和二十六年九月の朝日新聞に「日本哲学の渡米」と題して、次の記事が掲載された。

「東大助教、文学博士中村元（三十九）は東洋の四民族―日・支・印・チベットの各民族が、それぞれの民族性に従ってどのようにこれを変えて受け入れているかを研究し、一昨年『東洋人の思维方法』二巻を公にした。これがロックフェラー財団人文部門責任者の眼にとまり、注目されるに至り、博士はスタンフォード大学の招きで渡米、同大学で講義を行なうことになった。」

終戦後六年目の、まだ連合国占領下にあった当時に、日本学術研究の新生出発のシンボルとして脚光を浴びた大ニュースである。

そして、その八年後、ユネスコ国内委員会がこの同じ御本の全文英訳出版を企画した。この時、印度哲学科院生の筆者・川崎は「インド人の思维方法」後半数章の英訳担当の大役を仰せつかった。今振り返ると、まさに冷汗三斗の思いで身がすくむが、徹夜して作り上げた数ページの拙訳の精査チェックを研究室で中村先生御自身と日系アメリカ人留学生に挟まれて毎週受ける大果報を頂戴した。勿論、普段の御授業で中村先生から、ヴェーヴァンタ哲学専門研究・仏教文献原典研究と、広く深く懇切な御指導を受けていた。しかし、この『東洋人の思维方法』の英訳作業を通して集中的に洗礼を受けた（比較という手法によって説明する思想研究の開拓）は、小生にとつてその後の学問の道を進める上で大きな指針となっていたように思えてならない。

専門研究テーマは、『一切智（サルヴァジュニヤ）思想の研究』と題して、仏の持つ完全な智慧のあり方とその内容について、六世紀インド中観自立論証派の清弁（バヴィヤ／バーヴィヴェーカ）の『中観心論』・『思釈炎』サンスクリット原典・チベット語訳に基づいて精査することになった（春秋社刊）。また、専門研究の副産物として『原典訳・チベットの死者の書』（ちくま学芸文庫）を刊行したところ、これが思いがけない話題を呼んで驚いたこともある。今年度の東方学院の授業では、『般若灯論』を中心に受講者の皆さんと活発な考究を進めたい。「どんな時にも決して文献を手から

放すことなく、（比較）という高く広い視点から柔軟に考究する」中村学のエッセンスを忠実に少しでも皆さんにお伝えすることが我が身の生涯の使命と感ずるようになった近頃である。

生涯の誇りとしての東方学院講師

釈 悟震

(研究員)



昭和六十二年九月中村元先生の御自宅にお邪魔した際であった。『「韓国の言語と文化」という題で東方学院にて講義を担当してくれないか』という仰せで筆者は喜びと感激の一杯であつて以来、ちょうど二十年になる。

その折り中村先生の東方学院に対するお気持ちを感じ、二十一年という月日がへた今日においても昨日のように鮮明に筆者の脳裏に刻まれている。すなわち当日先生は、お座りになっておられた椅子から直立なさつて御頭上を下げながら「宜しくお願ひします」というお姿の前に筆者はどうすればよいのか頭が真っ白になってしまったのである。

それは先生が全知識だけではなく、理性の高い人格完成の方であることを物語ってくれることであると同時に、先生御自身が東方学院に対する真剣さと御愛情や研究会員の重要さを諭し賜った御姿勢であつたと理解をし、感嘆と感激をした憶えが今なお新しく蘇る。先生の初志一貫、真摯で高邁な精神を師表とし今日まで自らの生き方を進めて来た筆者である。

今一つ先生は東方学院「講師」を「私は世間でいわれる大学の講師として考へてはいない。少なくとも私の心の中には講師（こうじ）として思つていゝ」とも諭して下さつた。

つまり奈良時代の僧間の重要な経講し、その国の僧尼を監督し、これに経を講じた人を「国師」と呼んだ。のちに「講師（こうじ）」と改称し、平安時代には、諸国の国分寺にあつて、僧尼に関する事をつかさどり、仏典の講義をした僧官を勤めた人を「講師（こうじ）」と定めた。

このような由来から察するには、東方学院を日本国最高の学舎として位置づけ、真に学を究め、道を求めたい人々の学院として昇華させようとなさつたに違いないだろうと思う。それは東方学院設立当初からの講師御任命から明からであろう。

このような東方学院において講師の末席にて二十年間、絶え間なく研究会員と共に「師友録」を綴られたことは生涯の誇りに思うところである。

研究会員の声

東方学院での二十年 チベット仏教との出会い

森 秀雄



西岡祖秀先生との出会いは今から二十年前の平成元年までさかのぼる。ヒンディ語とネパール語を学んだ私はさらにチベット語をマスターしたいと思い、口語を独習していたが、文語は皆目できず諦めていたところ、東方学院でチベット語を学べることを知り、早速申し込んで出会ったのが西岡先生であった。先生はその年休講の予定であったが、三人の申し込みのために講義をしていただくことになった。これが契機となってチベット仏教の深い魅力に引きずり込まれ、いつの間にか月日が経ち現在に至っている。

一年で文法を終え、二年目からは、『プトゥン仏教史』を読み始めた。最初は一行読むのにさえ苦勞したことが当時のノートを見て思い出される。次に読んだ文献は、『維摩経』であった。漢訳と対照しながら読んでいった。この頃にはようやくチベット文語にも慣れてきたが、チベット訳と漢訳の違いに驚き、さらに興味がかき立てられた。当時の会員は、私も含めて五人になっていた。それから、チャンドラキールティの『ブラサンナパター』を読み始めた。これは中観帰謬論証派の代表的な論書でチベット仏教の真髓を学ぶには避けて通れない文献である。これを一部サンスクリット文と対照しながら読んでいったが、論理用語の独特な概念が理解しがたく、また、論理のすすめ方が特異なので、時が立つのも忘れ、先生を含めて喧々諤々の討論となったことも今は懐かしい。

この結果なった訳が東方学院関西支部で出版された『ディグナーガ認識論批判』（法蔵館・二〇〇一年）である。この出版に関しては、会員谷口圓雄氏の陰ながらの助力があった。この文献はあくまでサンスクリット文が主でチベット文が従なので、次はチベット仏教史の代表的な文献であるスムパ・ケンポの『パクサム・ジュンサン』を読むことに決まった。二年前に下訳はできたが、再度見直しをすすめ、現在も続行中である。仏縁というものがあるとしたら、私と西岡先生との縁もそのようである。

「絵画(宗教画他)実技」を学んで

中谷 信一



「絵画(宗教画他)実技」講座は平成十八年度から開設されました。菅沼莊二郎先生のアトリエに月二回土曜午後に通っております。講座は「民画、素朴画、宗教画の模写をし、素朴な絵の中に表されている根源的なものに触れ、その体験を基にして自由創作を豊かなものにする」ことを主眼としております。

先生は、「寒山拾得」をテーマとした水彩や油彩の創作を重ねるなかで、禅と現代アートとの関係について考察して来られた方です。

初年度は画材が扱いやすいパステル画を学び、二年目から油彩画に進みま

き、拭き取る・削り取るなど修正もできる自在さがあります。自在さ即ち腕次第で、未だ試行錯誤を続けております。

描くうえで、一枚に形・色などの配置をまとめるところがポイントであり、大変難しく苦勞しております。主題を際立たせるために細部を省くこと、背景の色を中心部と近づけること、明暗の法則性などを知りました。

絵の題材は、写真集や画集等から仏像画、更紗に表された動物・花鳥・婦人等の図柄、仏教国の人々の姿等から選び出しております。今年からは、自ら題材を決めることが課題に加わりました。日常の中から心がけて題材を見つけているうちに、季節の美しさにも以前に増して敏感に感じ取られるようになったのは嬉しい驚きです。

幸いにも初年度に、仏教彫刻講座展に仏像画の模写を出品する機会を得ました。それに伴い、額縁を選んだり、展示会場がインド大使館だったり、搬入の折に大勢の方々で交流できたのは、良い体験になりました。

未だ無心に描くことを楽しんでいるところですが、目前の対象に集中して描くときの緊張はとても心地よいものです。今後も楽しみながら精進を続けたいと考えております。

有意義な内容の講座ですので、ご参加いただく方が増えることを期待しております。

研究員紹介

田中公明



私が東方研究会の研究員となったのは、第十一号に「研究員紹介」に一文を寄せられた石川巖研究員と同様、中村元先生を学問上の師と慕われるチベット学の権威、山口瑞鳳先生のご推薦によるものです。もう時効になった(?)ので話しますが、これに先だって津田真一先生が東方学院でサンスクリット文献を講じられた時には、もぐりの学生として聴講していましたが、この両先生が、ともに中村先生を尊敬し、東方学院で講筵を張られたのは、中村先生の度量の広さを物語るものといえるでしょう。そして私の研究の基盤をなすサンスクリット写本とチベット語文献の研究は、この両先生との出会いから始まったといっても過言ではありません。

日本におけるインド・チベット仏教研究は、いま危機的な状況にあります。これまでインド・チベット仏教の研究を担っていた大学は、国公立は独立行政法人化、私立は若年人口の減少に伴う定員割れの危機に直面しており、不要不急の講座を統合・廃止する動きが加速しています。従来仏教系大学などに存在していた古典チベット語やインド・チベット仏教のポストも、教員の停年退職に伴って廃止されることが多く、このままでは関西の大手仏教系大学を除いては、チベット仏教の専門家がなくなるという事態が予想されます。

これは近年、アジア研究の全般的退潮にもかかわらず、チベット学の講座がつつぎと新設されているヨーロッパや北米の情勢に、完全に逆行するものといわざるを得ません。

幸いなことに、私が専攻するインド密教、チベット仏教、そして曼荼羅を中心とするチベット・ネパール仏教美術は、大学や国公立の研究機関のポストに関しては最も不遇ですが、社会的関心は高いので、著述・講演や、博物館・展覧会・TVビデオ番組等の学術監修などで、何とか研究生活を維持してゆくことができます。したがって私の存在は、日本の大学において欠落している分野を補うとともに、急速に研究環境が整備されつつある欧米に伍して一定の水準を維持してゆくためにも必要であると自負しています。

私が、中村先生の聲咳に接したのは、東京大学を退官し、東方研究会を旗揚げされてからの、晩年の一時期だけでした。しかし今になって思うと、中

村先生は、すでに大学におけるインド学仏教の衰退を予見され、大学における基礎研究の不備を補完するために東方研究会を創立されたのではないかと感じています。私も既に齢五十を越え、生前の中村先生を知る最後の世代の一人となってしまいました。中村先生を知らない若手の研究員に、先生が折節に述べられた言葉を伝えてゆくことも、私の責務であると考えています。

西村玲

日本仏教を専門としています。東北大学の学部から院（日本思想史専攻）へ進学した年に、中世南都（奈良）仏教の論義についての研究会に参加しました。その研究会メンバーに、今は愛知学院大学教授の荻輪顕量先生が、東方研究会研究員としていらっしやいました。先生から東方学院の手引きを頂いた時には、とても嬉しく、大事に仙台まで持って帰ったことをよく覚えております。私にとっては、中村先生が創設された東方研究会はあこがれの場所であり、自分がその一員になる日が来るとは、夢にも思いませんでした。

その後、中世南都から研究対象を進めて、近世（江戸時代）仏教を勉強し、二〇〇四年に博士論文（『近世仏教思想の研究——学僧普寂をめぐる諸問題——』）を提出しました。大学院修了時に、日本仏教の末木文美士先生のご推薦により、東方研究会の研究員となりました。

さまざまな角度から研究されている日本仏教は、東洋思想の中でも、研究が比較的蓄積されている分野と思いますが、祖師を輩出した鎌倉時代より後については、さほど進んでいるとは言えません。ことに近世の仏教思想は、封建体制下の葬式仏教と檀家制度の根源とみなされて、研究が忌避されてきた結果、非常に遅れています。しかし近世の仏教は、思想的にも制度的にも近代以後の日本仏教の土台であると同時に、現代の私たちの宗教と倫理の基礎を形作った思想の一つです。さまざまな思想が魅力的に展開していた近世思想史の中で、仏教思想もまた豊かに変容していました。

戦後、ほぼ儒学と国学のみで語られてきた近世思想史の研究を進めるために、さらには近代仏教を考えるにあたって、近世の仏教は欠かすことのない歴史的位置にあります。

そうした視点から、二〇〇八年に博士論文をもとにして『近世仏教思想の独創——僧侶普寂の思想と実践』（トランスビュー社）を出版しました。もう少し、江戸仏教思想の研究を続けていきたいと思っています。



二〇〇九年度 東方学院のご案内

来たる四月より東方学院の新年度が始まり
ます。二〇〇九年度からは左記の各講座が新た
に開講されます。各種講座の詳細やお申込方法
などは『手引き』またはホームページにてご確
認下さい。なお、二〇〇八年度より、受講料の
払込手数料を払込者負担に変更させて頂いてお
ります。それに伴い、**払込用紙が従来の赤色の
ものから青色の用紙に変更となりましたので、**
お申込の際はご注意ください。また、ATMで
の処理をおすすめいたします。

《関西地区教室》

- ・「臨床人間学入門」
【火曜・初級】西岡 秀爾 講師
- ・「ヒンディー語初級」
【木曜・初級】北田 信 講師
- ・「律文献の講読」
【木曜・初級】龍口 明生 講師
- ・「パーリ語入門」
【金曜・初級】勝本 華蓮 講師
- ・「パーリ語講読」
【金曜・中級】勝本 華蓮 講師
- ・「禅文献を読む」
【土曜（第一・第三）・初級】
沖本 克己 講師
- ・「古典インドの世界観」《集中講義》
【六月下旬、十一月中旬、二月下旬・中級】
佐藤 宏宗 講師



研究活動報告 — 研究部会紹介 —

当財団では、平成十九年度より、更なる研究活動の進展と研
究員相互の交流を目的として新たに研究部会を設置致しまし
た。全ての研究員がいずれかの部会に所属し、それぞれの分野
で研究に努めています。今後、各研究部会の活動報告ならびに
紹介を随時行っていきます。今号では「写本研究部会」の概要
および活動状況の紹介をいたします。

《写本研究部会》 主任・田中公明 研究員

写本研究部会は、仏教研究の基礎となる仏典の写本研究を目
的としている。平成二十一年一月六日、写本研究部会では、早
稲田大学の招聘で来日されたオックスフォード大学のアレクシ
ス・サンダーソン教授を迎え、本年第一回の研究会を開催しま
した。

今回は年始の繁忙期に当たり、多数の研究員の参加が見込め
ないため、田中・林両名の講座を聴講している研究会員の方々
にも声をおかけしました。

出席者は、田中公明、林慶仁、柴崎麻穂の三名の研究員に加
え、研究会員四名の合計七名が出席し、司会は田中が務めまし
た。なお司会に当たっては、柴崎麻穂研究員の夫君ジョナサ
ン・ルイス教授にスクリーンプロットの英文を点検していただきま
した。アレクシス・サンダーソン教授には、Transformation of
Buddhism under Shaiva influence during the Pala dynasty
と題し、パーラ朝時代の仏教とくに密教に対するシヴァ派の影響
について、ご講演いただきました。

今回は研究会員を勉強会に招待
したので、先生には講演の区切り
ごとに中断していただき、田中が
要点を日本語で説明しました。

なお研究会員の中には、英語の
講演中に熱心にノートをとり、講
演後の質疑にも加えられるなど、
英語に達者な方もおられ、本学院
の研究会員のレベルの高さを改め
て認識いたしました。



鰻供養

東京は下町のある仏教会での話。会議終了後の食事を
信者さんの料理店主がご馳走して下さることになった。
出てきたのが活き作りだった。大きな伊勢エビは刺身
にされながら角をグリグリグルリとまわっているし、鯛は
しっぽをピクンピクンと跳ね上げていた。

お坊さん方は皆法服である。さすがにギョツとした雰
囲気は隠せなかったが、誰もとなく音頭をとる人がい
た。般若心経をみんなで朗々と誦読し、美味しくいただ
いた。

活き魚料理の是非は別として、きわめて日本的な、
そして仏教的な風景であり、発想である。

私たちに動物の生命、植物やもののイノチを奪わな
ければ生きていけないという、人間としての悲しい業の
ようなものがある。肉食主義にすれば片がつく、という
問題ではない。

どうしたらいいのだろうか。

脚下照顧

この問題に対して日本人が出してきた一つ
の答えが鰻供養である。さんざん鰻を食べ
てから、霊あらば安かれ、と法要を行い、懺悔
と感謝の意を表す。外国人の目にはこれは
ナンセンスと映る。美味しければ食べればい
い。後で謝るくらいなら食べるな、というの
だが、これは文化の違いである。

日本には、(そして東洋にも)人間は動植
物、自然を恣意的に自由にしていい、という
西欧的な発想はない。すべては平等のイノチ
を奪うときには、懺悔と感謝の意を表しなければなら
ない。殺生はするが、忸怩たる思いをかみしめているのであ
る。

鰻供養のほかにも、鮒、鯛、鯨などの供養があり、さ
らに人間がそのイノチをすりへらさせた針、筆、算盤、
農具などの供養も行われている。仏教的な「イノチ」を
尊重する一つの形だと言っている。

般若心経を読んで、活き作りを食べた、という行為の
背後には、こうした長い宗教文化の伝承がある。

お経さえ読めば何をしてもいい、ということではな
い。お経を読まざるを得ない心情と世界観を自覚し、殺
生の意味を深くさぐっていき生き方が要請されてい
る。

(奈良康明)

財団法人東方研究会からのお知らせ

会員募集のお知らせ

当財団では各種会員制度を設け、随時募集いたしております。会員には、機関誌『東方』をはじめとする各種情報の提供が受けられる普通会员と、当財団への支援を主な目的とする賛助会員、ならびに維持会員がごさいいます。

◇普通会员◇

普通会员の皆様には、毎年一回発行される機関誌『東方』の他、当財団主催の各種行事および会合等に関するご案内をお送りいたしております。

年会費 七千円

◇賛助会員◇

◇維持会員◇

当財団では賛助会員ならびに維持会員を募集いたしております。当財団の趣旨にご賛同頂ける皆様からのご協力をお待ちいたしております。なお、募金の趣旨をご理解の上、できうるかぎり複数口のお申し込みを賜りたく存じます。

賛助会費 一口 一万円
維持会員 一口 五万円

* 詳細は財団法人東方研究会事務局までお問い合わせください。

『東方』第二十四号 刊行

三月三十一日、当財団の機関誌『東方』の最新号が刊行されます。今号には論考六篇・報告二篇のほか、鎌倉夏期宗教講座の講演録及び中村元博士東方学院講義録（『大唐西域記』を読む）、「ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）著『涅槃』IⅴII―邦訳と註記―」など各種連載記事を掲載いたしております。

なお、本誌は会員（研究会員を除く）の皆様にお送りしているほか、各種研究機関・図書館等にも納められています。頒布可能なバックナンバーもごさいいますので、詳細は事務局までお問い合わせください。



新春研究発表会 三月開催

毎年恒例の当会主催の新春会が、昨年からは名称を改め「新春研究発表会」として開催されることとなりました。各種会員の皆様のお越しをお待ち申し上げております。

【開催概要】

日時 平成二十一年三月十六日（月）午後四時開場
会場 東京ガーデンパレス
東京都文京区湯島一七七一五
電話 〇三―三八―三二六二二

一、講演の部（午後四時半～六時）於「高千穂」（三階）

講師 目片祥子氏（大谷大学大学院）
講師 佐藤良純氏（大正大学名誉教授）

二、懇親会の部（午後六時～）於「高千穂」（二階）

* 各種会員にはお知らせが届きます。
詳細は事務局までお問い合わせください。

東方学院では、各種講座の内容・受講料・お申し込み方法などを記載した『二〇〇九 東方学院の手引き』を配布いたしております（無料）。事務局にお越し頂ければ直接お渡しいたします。
郵送をご希望の場合は、「手引き希望」と表記した封筒に入手を希望される方の郵便番号・住所・氏名・電話番号を記した紙を同封の上、東方学院事務局宛にお送り下さい。本年から送料も学院負担となりましたので、無料で『手引き』をお送りいたします。
なお、複数部をお求めの方は別途お問い合わせをお願いいたします。

【主な執筆者】

- ・前田 専學 (東方学院院长)
- ・下田 正弘 (東京大学教授)
- ・蘭田 稔 (京都大学名誉教授)
- ・定方 晟 (東海大学名誉教授)
- ・茨田 通俊 (東方研究会研究員)
- ・佐々木 一憲 (東方研究会研究員)
- ・入井 善樹 (光教寺住職)
- ・佐久間 留理子 (東方研究会研究員)
- ・水越 正彦 (東方研究会研究員)

(敬称略)

交通のご案内（東京本部）

鉄道各線の最寄駅（徒歩十分以内）

JR東日本

中央線／総武線 御茶ノ水駅「聖橋口」

つくばエクスプレス

秋葉原駅「A3出口」

東京メトロ

銀座線 末広町駅「3番出口」

千代田線 新御茶ノ水駅「B2出口」

丸の内線 御茶ノ水駅「郵便局口」

当財団本部及び東方学院東京本校のあるビルは神田明神通りと神田神社の正面参道に面しております（大鳥居東隣）。



外 観

(延寿御茶ノ水ビル 4階)

* 駐車場・駐輪場のご用意はございません。

「東方だより」編集部より

編集部では読者の皆様からのご意見・ご要望・ご寄稿をお待ち申し上げております。詳細は当財団事務局「東方だより」編集部までお問い合わせ下さい。なお、ご連絡は手紙（宛名面に「東方だより編集部宛」とご記入願います）にて承ります。

東方だより 第十三号（平成二十一年二月一日）
編集／発行 財団法人東方研究会